

『トイレの神様』が道徳資料にとりあげられる意味

—潜在的カリキュラムとしての「修養」的価値観の形成—

Signification of “Toilet Goddess” as material for moral education

—The formation of values of Self-discipline (Shuyo) as the hidden curriculum—

瀬 川 大

Dai SEGAWA

Abstract

We are here concerned with the structure of story for 3 materials for moral education. We analyzed first, “Toilet Goddess (Toilet no Kami-Sama)”, that is a Japanese pop song and made a big hit in 2010, second, “My teachers were hippopotamuses”, an autobiography written by Toshio Nishiyama, a onetime head at TOBU ZOO. Third, we examined “Mr. Night Watch (Yomawari-Sensei)”, written by Osamu Mizutani, who had been teaching special need education school and high school, and has faced over 5000 boys and girls.

It was found from the result that these all materials have the same structure of story. In these stories, protagonists had to do dirty work, and they had a disinclination for their work once. But, they regretted their thoughtlessness by understanding importance of their work. Finally, they all became willing to do the tasks, and filled with feeling a sense of gratitude. Their Way of thinking that was formed in this way is called self-discipline (shuyo), which Ruth Benedict pointed out in “The Chrysanthemum and the Sword”. Self-discipline, which we can find out in these materials, is an example of the hidden curriculum.

We lastly argued that self-discipline is infiltrated through Japanese society, so teachers need to be conscious of it, or they can force their students to do dirty work, to have thought of self-punishment. Students may understand that moral education is teacher’s public position. Furthermore, we are afraid that teachers will feel frustration by trying self-discipline thoroughly and unconsciously, because it means self-denial.

Keywords: moral education, self-discipline(shuyo), gratitude, hidden curriculum, “Toilet Goddess (Toilet no Kami-Sama)”

I. はじめに

2010年にヒットした植村花菜『トイレの神様』は多くの人の記憶に新しいだろう。亡き祖母との思い出を語り、感謝の念を歌う『トイレの神様』は、同年の年明けにFMラジオで流されたことをきっかけに、同曲を取録したアルバムが発売される前から注目がなされた。そして発売後も反響を呼び、年末の「NHK紅白歌合戦」にも登場したほか、絵本、小説、TVドラマなども制作された。

このように多くの人を感動させた作品群であったことから、道徳教育、特に特設道徳の授業において題

材として取り上げられたのは極めて当然だといえる。道徳の授業で用いたとの実践報告がなされ¹⁾、市販されている道徳授業資料集に掲載される²⁾だけでなく、2011年度からは、小学校で使用する道徳副読本にも『トイレの神様』が登場するに至った³⁾。

本稿が目にするのは、この題材を道徳授業で用いるねらいである。上にあげた道徳授業や実践報告は、授業のねらいを家族の大切さ、家庭愛としている。道徳の副読本においては、ねらいを「家庭愛」と明記し、合致する学習指導要領の内容項目を4-(5)、すなわち「父母、祖父母を愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする」、市販の資料集の場合、中学校学習指導要領の4-(6)、「父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭

生活を築く」に求めている。

確かに『トイレの神様』では、祖母との共同生活のさまが、具体的な様子で語られ、懐かしく回想するものとして歌われている。したがって、家族の大切さを教える題材として用いられることにも一定の理由がある。しかし、植村氏が祖母に感謝を示しているのは、単に一緒に住んでいたからではない。後述するように、生きるために重要な「心がけ」を、身をもって教えてくれたからであり、それに気づかずに反抗した自分を責めることなく無償の愛で包んでくれた、と植村氏が感じていたからであろう。そして歌を聴き、絵本や小説、TVドラマを観た多くの人が感動するには、その「心がけ」の内容が、当然なまでに妥当なものとして理解されていることが必要になり、実際に多くの人がこれらの作品群に感動の涙を流した。そうした「心がけ」の価値が、日本社会で広く共有されていることになる。

『トイレの神様』を道徳授業で家族愛の題材として用い、または副読本に掲載したことは、道徳の授業において家族の大切さを教えながら、その根底にある植村氏とその祖母、教員が共通して無意識に賛意を示すその「心がけ」をも、意図せず生徒に教えたことになる。

学習指導要領において、こうした「心がけ」が意識して教えるべき内容として、掲載されているわけではない。そうした道徳的価値観は、副読本製作者や授業実践者にとって、あまりにも当然のものであり、意識すらされていない。そうした「心がけ」は道徳の授業において題材を通して教えられるため、結果として児童・生徒が学んで身につけることになる。しかも、この価値観は、本論で明らかにするように、他の題材にもみられるほか、実際の教育者たちにも共有されている。決して『トイレの神様』のみでの価値観に限られるものではなく、教員をはじめ学校教育において広くみられるものである。つまり、ここに見られる価値観は、学校に通う児童・生徒も当然のように触れ、身につけるであろうこと、つまり潜在的カリキュラムとして学校の中に存在していることが推測される。潜在的カリキュラムは、さしあたって「学校において表立っては語られることなく、暗黙の了解のもとで潜在的に教師から生徒へ伝達されるところの規範、価値、信念の体系である」⁽¹⁾と定義できる。『トイレの神様』に典型的に表れている「心がけ」、価値観も、その一つであると考えられる。

本論で明らかにするように、ここで示される「心がけ」、価値観とは、「修養」的な価値観である。もっとも、「修養」とは、一般に「精神を練磨し、優れた人格を形成するように努めること」⁽⁴⁾などのような抽象的な語で語られることが多く、具体的にどのような特質をもつのか述べられることがあまりない。したがって本稿では、「修養」がどのような価値観を持つのか、素材を通して具体的に検討する。

本稿は、次のことを目標とする。まずⅡにおいて、『トイレの神様』のストーリー構造から、教えられる「修養」の内容や、思考の形式を指摘する。辞書などに見られる抽象的な定義からは推し量ることのできない特徴や、心理的・身体的な形成プロセスによって、「修養」的価値観が形成されることを明らかにする。次いでⅢにおいて、本稿で指摘される「修養」的価値観やそれを形成するストーリーは、『トイレの神様』以外の題材や教育者などにもみられることを指摘し、道徳教育における価値観として共有されていることを示す。そしてⅣにおいて、そこに共通する「修養」的価値観を無意識に教えることが児童・生徒、教師に与える危険を、取り上げたい⁽²⁾。

「修養」をとりあげるにあたり、最近刊行された、注目すべき研究を整理しておきたい、歴史的・哲学的・心理学的なアプローチによる共同研究『人間形成と修養に関する総合的研究』が刊行された⁽⁵⁾。同書においては、「修養」について、「主として学校教育以外の場所で、個々人が生きていく上で、自発的に自分の精神と身体を律して他者とつながりながら自分を高め成長させていく力を身につけ、自由で個性に沿った人間形成をはかるもの」⁽⁶⁾と、やや具体的に定義している。これまでの研究において、「修養」という人間形成の本質をめぐり、自発性重視の立場と強制重視の立場で意見が分かれてきた⁽⁷⁾。その意味で、同書の定義は立場を明確に示したといえ、「修養」の特質にやや踏み込んだ定義として評価できる。また、同書は「修養」と学校の道徳教育との関係で「感謝」という徳目に着目しており⁽⁸⁾、本稿は同書から大きな示唆を受けている。

しかし、同書においては、なぜ強制の視点を重視する研究も多く存在したのか、という点への考察が不足しており、この点に答えることは、「修養」の特質を考える大きな鍵になるといえる。本稿は、この点について考察することで、「修養」的な思考様式の問題について言及したい。同書は『トイレの神様』について

も触れているが、注による簡単な指摘にとどまり、十分に中身について吟味しているとは言えない⁹⁾。本稿は、現代における「修養」を考える際に欠かせない素材と考え、分析の材料とする。

さらに、「主として学校教育以外の場所」という規定についても一言したい。意識的な「修養」実践自体は同書の言うように学校を離れて行われることが多いのだが、それに伴う価値観は学校でも学ぶことが可能である。「修養」的価値観に基づいたさまざまな営為の記録や文章が、往々にしてそれとは異なる価値や内容を教える教材としてふさわしい優れた内容を持ち、学校に持ち込まれるのである。

なお本稿では、「修養」実践のうち、それによって「修養」的価値観を、しばしば無意識に身につける過程を『「修養」的価値観の形成』として着目し、「修養」実践それ自体とは相対的に区別して考察する。

Ⅱ. 『トイレの神様』のストーリー構造

本節では、『トイレの神様』の歌詞のストーリーから、「修養」的価値観の内容を検討する。そのため、長くなるが『トイレの神様』の歌詞を引用したい。

小3の頃からなぜだか おばあちゃんと暮らした
実家の隣だったけど おばあちゃんと暮らした
毎日お手伝いをして 五目並べもした
でも、トイレ掃除だけ苦手な私に おばあちゃんがこう言った
トイレには それはそれはキレイな女神様がいる
んやで
だから毎日キレイにしたら 女神様みたいにべっぴんさんになれるんやで

その日から私は トイレをピカピカにし始めた
べっぴんさんに絶対なりたくて 毎日磨いてた
買い物に出かけた時には 二人で鴨なんば食べた
新喜劇録画し損ねたおばあちゃんを 泣いて責めたりもした
トイレには それはそれはキレイな女神様がいる
んやで
だから毎日キレイにしたら 女神様みたいにべっぴんさんになれるんやで

少し大人になった私は おばあちゃんとぶつかった

家族ともうまくやれなくて 居場所がなくなった
休みの日も家に帰らず 彼氏と遊んだりした
五目並べも鴨なんばも 二人の間から消えてった
どうしてだろう？ 人は人を傷付け、大切なものをなくしてく
いつも味方をしてくれてたおばあちゃんを残してひとりきり 家 離れた

上京して二年が過ぎて おばあちゃんが入院した
痩せて細くなってしまった おばあちゃんに会いに行った

「おばあちゃん、ただいまー！」ってわざと 昔みたいに言ってみただけ
ちょっと話ただけだったのに 「もう帰りー。」って 病室を出された

次の日の朝 おばあちゃんは静かに眠りについた
まるで まるで 私が来るのを待っていてくれたように

ちゃんと育ててくれたのに 恩返しもしてないのに
いい孫じゃなかったのに こんな私を 待っていてくれたんやね

トイレには それはそれはキレイな女神様がいる
んやで
おばあちゃんがくれた言葉は 今日の私をべっぴんさんにしてくれてるかな

トイレには それはそれはキレイな女神様がいる
んやで
だから毎日キレイにしたら 女神様みたいにべっぴんさんになれるんやで

気立ての良いお嫁さんになるのが夢だった私は
今日もせっせと、トイレをピカピカにする

おばあちゃん おばあちゃん ありがとう、おばあちゃん ホンマに ありがとう¹⁰⁾

以上の歌詞は、以下の4つのからなるストーリーとして読むことができる。

① 「私」は、実家の隣で「おばあちゃん」と一緒に

住み、トイレには「キレイな女神様が」おり、掃除することで「べっぴんさんになれる」と教えられ、苦手だったトイレ掃除を一生懸命するようになる。

- ② 思春期を迎え、「おばあちゃん」や家族と衝突した「私」は、居場所がなくなり、家を離れる。
- ③ 上京の二年後、「おばあちゃん」が入院し、「私」が見舞った翌日に息を引き取る。「いい孫じゃなかった」と反省し、「そんな私」を、「おばあちゃん」は最期まで待っていてくれたと感じる。
- ④ 反省した「私」は、改めて毎日のトイレ掃除に積極的に取り組む。このことは、「気立ての良いお嫁さん」になるために必要なことであることを理解し、おばあちゃんに感謝の気持ちをささげる。

①行すべき重要な仕事があり、②しかし本人はそれを行いたくない（わがまま）、③②の気持ちが間違いだと思えば反省、④①の仕事を今度は進んで行うようになる、というシンプルで分かりやすいストーリー展開である。

ただし、小説『トイレの神様』を読む限りでは（そしておそらく事実も）、歌ほど明確なプロセスをたどったわけではない。確かに中学生以降喧嘩をすることが増えるようになるものの、祖母は植村氏のアルバイト先を訪ね、高校卒業と同時に自宅を二世帯住宅にすると、植村氏は祖母と同世帯に住むようになるなど、概して祖母との関係は良好である¹¹⁾。トイレ掃除に関しても、高校時代にも一生懸命、楽しそうにトイレ掃除当番を行っていたエピソードが記されている¹²⁾。また、上京後の生活は「東京と大阪、半分半分」¹³⁾であり、祖母が亡くなるまでの間も時折実家に帰省もしている¹⁴⁾。さらに祖母の死後、植村氏が反省するのは、長い間一緒に住んでいたにもかかわらず、祖母の人生について知らないことだらけだった点である。特にアコースティックギターが好きだったことを「知っていたら、いくらだって弾いてあげたのに」¹⁵⁾という後悔である。つまり、歌詞は事実以上に植村氏が祖母やトイレ掃除から離反していることを印象づけていることになる。そのため、そののちに訪れる反省や、トイレ掃除への積極的な取り組み、祖母への感謝などとの落差も、より大きいものとして、歌の聴き手に認識されるのである。

本稿にとって、この相違は重要である。この違いにより、重要な価値をもつ事物に対して、本人の積極的な受容というゴールに至るには、「苦痛→離反→反省→受容」というコースをたどるものである、という

メッセージがより強力に、歌の聴き手に伝わっていることになるからである。すなわち、植村氏が感謝している祖母の教えとは「本当はやりたくないが重要な仕事を、自ら進んで行える人間になる（そのための努力をする）」ことであり、そうした「心がけ」、価値観をもつ人間のことを「べっぴんさん」と呼んでいるのである。

こうした「心がけ」、価値観こそルース・ベネディクトが『菊と刀』で紹介している「修養」の考え方に他ならない。ベネディクトによれば、日本人は「有徳の人間は他人のためになすことを、自己の願望の抑圧と考えてはならないと主張する」¹⁶⁾。そのような徳を身につけるための「修養」という自己訓練は、「当初には人はどうも辛い抱ができないと感じるかもしれないが、その感じはまもなく消えてゆく…それはおしまいには訓練が楽しみになるから」であるという。その結果、「丁稚は立派に商売の役にたつようになり、少年は“ジュードー”[柔道]（“ジュージュツ”）を覚え、嫁は姑の要求に合致するようになる」、といった「処世態度を改善」¹⁷⁾した人間となっていく、とされている。

そして、こうした特徴を持つ「修養」的価値観を身につけるための実践は、前述の「苦痛→離反→反省→受容」プロセスをたどることが求められる。序章で述べたような「強制」は、プロセスの最初にそもそも「苦痛」を引き受けるためには、しばしば必要な契機として存在したと考えられるのである。

Ⅲ. 他の事例にみられる「修養」的価値観の形成プロセス

1. 「カバ園長」のトイレ掃除と人生の転機

別の道徳副読本においても、前節で確認した「修養」的価値観の形成プロセスをたどる話が登場する。一例を挙げれば、6年生用の題材として「ぼくの仕事は便所そうじ」が掲載されている¹⁸⁾。この話は「カバ園長」として知られた、元東武動物公園園長の西山登志雄氏の自伝¹⁹⁾の一部である。16歳で上野動物園に勤め始めたころのエピソードが題材として挙がっている。その概要を見てみよう。動物の飼育係になりたくて半ば強引に就職した西山氏の、上野動物園での最初の仕事は、人間のトイレを含む、園内の掃除だった。当時、「7か所ぐらいに便所があり、数が少ない

せいなのか、とても使い方がきたならしく、「その仕事は決して楽しいとはいえなかった」。

しかし、ある冬の寒い日、そんな西山少年に転機が訪れる。

…ぼくはかじかむ手で、いつものように便所をそうじしていた。ある便所のそうじに向かったら、おばあさんがちょうど使おうとしているところだった。ぼくは、その間、便所の外をそうじしていた。するとそのおばあさんが出てきて、手を洗いながら小さな声で言った。

「この便所はだれがそうじしてくれたのかしら。とってもきれいになっていて、使っていて、本当に気持ちがいい。ありがたい。ありがたい。」

そう言いながら出ていった。

それを聞いたとき、ぼくは、カナヅチでぶんなぐられたくらいショックを受けた。

ーイヤだイヤだと思っていた便所のそうじだが、きれいな便所ならきっとだれかが喜んでくれる…。

以後一生懸命掃除して、きれいなトイレになるように工夫を重ね、一年後に希望していた飼育係に昇格した。当時を振り返って、トイレ掃除が「ぼくの人生に大きな転機をもたらしてくれた」—というものである。

このエピソードにおいても、①トイレ掃除を勤務内容とする→②楽しくない仕事→③「おばあさん」の言葉を聞いて深く反省→④自ら積極的に取り組む、というストーリー構成を持っている。また、このトイレ掃除が「人生の大きな転機をもたらした」とまで言い切っているのである。すなわちトイレ掃除が、西山氏が人間を磨く大きな要素となっており、その過程を見ても「修養」的価値観の形成プロセスをたどっていることは明白である。また、この文章については、関連する学習指導要領の内容項目として4-(4)「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする」が挙げられている。

もっとも、副読本の記述では、就職当初におけるトイレ掃除に対する感想について、「その仕事は決して楽しいとはいえなかった」と、やや控えめな表現になっている。ところが、原著では、もっと露骨にトイレ掃除への不満を吐露している。そもそも人間のトイレ掃除は、新入職員が必ず行くと決まっていたわけで

はなく、ほとんどの職員は大学を出て試験を受けて就職するのだが、西山氏は旧制商業学校在学中の16歳で特別に頼み込んで雇ってもらった身であり、したがって皆がやりたくない仕事を担当することになったという経緯がある²⁰⁾。であるから、西山少年は「みんなも一度体験するとわかるのだが、便所そうじほどイヤなものはない」。「16歳の少年にとって、実にふゆかいだし、非常に屈辱に満ちているし、きらいだったのだ。イヤでイヤでしょうがなく、明日にでもやめようと思ひながら、仕方なく」²¹⁾掃除をしていたのである。さらに、自伝執筆時点における「心がけ」を記した文章として、副読本の掲載部分の後に、「今、55歳をすぎて、ボクが一番大事にしていることは、「ありがとう」という言葉をいつでも使える自分になっておこうということである。便所をそうじしていたときの、あのおばあさんの言葉なのだ。あれを、自分がやろうと思っているのだ。」というくだりが続いている。西山氏は、この出来事から「感謝」の大切さを強く学んでおり、原著を読むと、仕事受容に関しては、副読本以上に強く感じられる。

このように、原著と副教材の記述を比較すると、原著の方が仕事への忌避感と反省・受容との落差が大きく、この点では前述の『トイレの神様』と逆の扱いになっている。このような重要な個所を削除した理由は、文章の分量をちょうど4ページに収めようとしたためと推測される。いうまでもなく、教材においては形式も重要な要素であるから、この推測は的外れではないだろう。とはいえ、この文章の改変によって、ストーリーのインパクトが弱くなったことは事実である。また、このインパクトを弱める改変をあえて行ったという事実は、「修養」という道徳的価値、およびその形成プロセスに関し、副読本の製作サイドが自覚的ではなかった、ということを示すものであるといえよう。さらにいえば、先述のように、同じトイレ掃除を扱った文章であっても、教える道徳的価値は一方は「家庭愛」、他方は「勤労」とされている。しかし、トイレ掃除を積極的に行うに至るストーリーは同型である。このように、「修養」的価値観およびそれを形成するプロセスは、強く自覚されることなく道徳資料として採用されており、まさに潜在的カリキュラムの一例ということができよう。

2. 「夜回り先生」の「修養」し続ける人生

教員をはじめとする教育者は、教材を用いて子どもを指導するだけでなく、自らを生きる教材として子どもの前に差し出す存在でもある。従って、教育者が保持している道徳的価値観については、十分な検討が必要である。そのように考えたとき本稿で明らかにしてきた「修養」的価値観を有している教育者は多い。中には、自らの教育者としての成長物語を、「修養」的価値を形成するストーリーとして語る者もいる。その例として、「夜回り先生」として有名な水谷修の例を取り上げてみよう⁽³⁾。

苦しんでいる多くの子どもや若者と向き合ってきた活動については、水谷氏自身が多くの書物やDVDなどで語っている。ここでは、自らの生い立ちなどについても言及している『夜回り先生』(2004年)⁽²²⁾を手がかりとしたい。

定時制高校に異動と同時に夜回りをはじめ、12年間で5000人近い子どもと関わってきた水谷氏だが、そうした活動を決して手柄顔で語っていない。むしろ、『夜回り先生』の記述で特徴的なのは、生い立ちから執筆時点に至るまで、失敗や過ちのエピソードが多く告白されていることである。そのたびに反省し、それらの経験を通して現在の水谷氏の生き方が形成されている、というストーリーとなっている。

例えば、水谷氏は「私も『いじめ』をやったことがある。」と告白している⁽²³⁾。横浜で教師をしている母と離れ、山形県の寒村で祖父母に育てられた水谷氏は、貧しさや両親がいなくて寂しさを抱えた子ども時代を過ごした。やがて母と一緒に暮らすようになるが、母は障害児をよく自宅で預かり、その間水谷少年のことはそっこのけで、水谷少年は子どもたちのおむつ替えばかりやらされた。「やっと一緒に暮らせるようになったのに、たった一人の母親なのに、その幸せを知らない子どもたちに奪われたような気がした」水谷少年は、母親の留守を狙って子どもたちをつねったり蹴ったりしたという。それが弱い者いじめだということも、惨めなことも分かっているがやめられなかった水谷氏は、「毎日が憎しみと自己嫌悪の繰り返しだった。もう二度と同じ轍は踏みたくないし、誰にも踏ませたくない」と述懐している。

初任時のエピソードは、水谷氏の職業観形成を考える上で極めて重要である⁽²⁴⁾。「ただ勉強を教えるだけではなく、懸命に生きることの大切さを伝えたかっ

た」水谷氏は高校教員を希望していたが、就職した最初の赴任先は特別支援学校だった。そこでは介護業務が主で、「いつも辞めることばかり考えながら、嫌々仕事をしていた」。3か月ほど経って、生徒のお尻のシャワーをうっかり冷水にしてしまったが、「それがどうした」と聞き直ってしまう「すさんだ人間になっていた」水谷氏は、先輩教師から叱責され反省した。

心から自分を恥じた私は、その先生に頭を下げて、再び子どものお尻を丁寧に洗い直した。何も反論できなかった。子どもと同じ目線で接することができなければ、どれだけ理想を掲げても教育者の資格はない。板坂先生というその教員を見て、その堂々たる姿勢に私は胸を打たれた。

その日の出来事から、私はなぜ教師にならなかったのかをもう一度見つめ直すきっかけをつかみ、自分の仕事に誇りを持てるようになった。私を求めてくれる子どもたちが、こんなにたくさんいる。そして私は、彼らの要望に応える能力を持っている。そう思うだけで、とても晴れやかな気持ちになった。私は養護学校(マ)の教師だ。そこではできないこともあるが、そこでしかできないこともたくさんある。それだけで十分だった。

その上で、水谷氏はその先輩教師に対し、「板坂先生は今も、私が最も尊敬する教員仲間の一人だ。彼には感謝してもしきれない。」と、強い感謝の念を捧げている。ここに見られるストーリー、および結果として出来上がった職業倫理は、これまでに述べてきた「修養」的価値観およびその形成プロセスと見事に合致する。むしろ典型的な事例といえるかもしれない。その後水谷氏は、友人との喧嘩という、ひよんなきっかけで定時制高校の教員になったのだが、こうして職業倫理を突き詰めていったことが、水谷氏の「夜回り」を誕生させたといつてよいだろう。そして同書の結論部分において、「夜回り」について、自分の生きがいだと語り、『「夜回り」によって救われたのは私自身だ。夜の街で苦しんでいる子どもたちから、私は生きることの素晴らしさ、誰かのために何かできることの喜びを教わった』と総括している⁽²⁵⁾。水谷氏は人生をかけて、「修養」的価値観を形成し、実践し続けたといえるだろう。そして、そうした水谷氏の生き方に共感を覚え、敬意を抱くとすれば、それは以上のような価値観に同意していることになる。

IV. 「修養」的価値を無意識に教える危険について

以上、教師自身が「苦痛→離反→反省→受容」という「修養」的価値観の形成プロセスを、感謝の念を以てたどるケースを見た。こうして身についた「修養」的価値観は、道徳教育において当然のように、無意識のうちに教えられる。しかし、それらがあまりに無自覚に行われる場合、やはり疑問を感じないわけにはいかない。まず前提として押さえておかなければならないのだが、「修養」は日本社会ではありふれているものの、他の文化圏では当たり前な価値観ではない。先述の『菊と刀』を想起したい。アメリカ人にとっては、「修養」は自己訓練ではなく、自己犠牲にしか見えないのであって、ベネディクトは両国の自己訓練に対する考え方の違いを、驚きを以て記している²⁶⁾。すなわち、「修養」的価値観は、ある社会に特定のものであり、決して人類普遍のものではない。特に多文化共生社会が教育においても目指されている⁴⁾。現在、道徳教育において「修養」的価値観を、「生命尊重」や「人権」などと同列に教えることはできない⁶⁾。その上で、注意すべき点について述べたい。

第1は、生徒に「やりたくないこと」を強制してしまう危険である。「修養」的価値観のもとでは、当初本人が行いたくない仕事を、最終的に自発的に行うことが「正しいこと」とされる。それに対する自覚が欠如すると、当の「やりたくない仕事」「苦痛なこと」を本当にやるべきか否かという吟味が行われない危険が伴う。もしこの吟味が行われず、価値形成が形式的にのみ進められてしまうと、「やりたくない仕事」「苦痛なこと」をこそやれるようになることが道徳的に正しいということに短絡されてしまう恐れがある。道徳的価値の形成行為が児童・生徒によって自発的に行われる場合にも問題はあがるが、教師の指導により行われる場合は特に、「内容にも意味がない、生徒が嫌がる仕事」を強制してしまうことを避けなければならないであろう。

第2は、正確な思考・判断を妨げてしまう危険である。「修養」的価値観に基づけば、問題の解決が、「問題は自分にある」という自罰的な思考によって処理される。確かに、発達途上の児童・生徒にとって、自分は現状維持でよいはずはなく、未来によりよい自分を求めなければならない。しかし、不都合・苦痛がすべて自分の至らなさ起因するということも、現実的に

はあり得ない。それをすべて自罰的に片付けてしまうとすれば、それは松下良平のいう「反利己主義・利他主義としての思いやり」と通底し、かえって道徳的には不誠実な態度になりかねない²⁷⁾。児童・生徒が不都合・苦痛なことと遭遇した時に、その原因を徹底して探り、正確に導き出したうえで対処し解決する、というプロセスへ導くことが、道徳教育の指導としては望ましい態度ではないだろうか⁶⁾。また、学習指導要領でいうところの道徳的判断力を育てることもつながらと考えられる。

第3は、潜在的カリキュラムとして機能し、かえって道徳教育が無効化してしまうという危険である。価値が多様化しつつある現代日本社会においては、「修養」的価値観ははまだ多くの人に共有されているとはいえ、支配的なものとはなりえない。年若く、社会にも十分触れていない児童・生徒の間への浸透度は特に低いであろう。教師が無自覚に「修養」的価値観を教えてしまうと、児童・生徒側も違和感の原因が分からず、第1、第2の点と相俟って、感情的な反発・忌避感、ひいては道徳教育に対し、「現実とは違う建前を押しつけるうとうしいもの、身につけなくてもいいもの」であると学んでしまうことに帰結することが危惧される。これは杞憂ではない。現に、筆者が注(2)に挙げた授業で『トイレの神様』を用いた際、明らかにうわべだけ「『トイレの神様』に感動した」のように感想を書く学生が一定数おり、中には感情的な反発を綴って提出した学生も少数だがいた⁷⁾。このように、教職をめざす学生の中にもすでに、道徳教育に対する忌避感が存在する。また付け加えれば、学生は共感であれ反発や忌避感であれ、その論拠を示すことはほとんどない。つまり、自分や相手の持つ価値観を冷静・客観的に考察することなく、いわば思考停止状態で自分や他者と向き合うことに、道徳教育は手を貸してしまっているのではないだろうか。

第4は、教師が陥ってしまいかねない陥穽である。「修養」的価値を徹底していけば、それは肉体的・精神的な自己否定につながる。したがって、教師が人生を全うするためには、どこかの時点で「修養」的価値の純化を止めなければならない。しかし、その止めるという行為の意味を自覚していなければ、自分が妥協した失格教師だという罪責観に悩まされるか、開き直った言行不一致の教師として過ごしていかざるを得ない。こうした思いが、教師にとってマイナスであることはもはや言うまでもないだろう。

V. おわりに

以上、道徳教育の題材や教育者の価値意識の根底に「修養」的価値観があり、形成する形式がそこでは踏襲されていることを明らかにしてきた。ここに見られるような価値観は、学校生活の様々な場面でみられるだろう。トイレ掃除というまでもなく、各教科における勉強観において、部活動などの特別活動において、教員の働き方⁽⁸⁾において…。「修養」的価値観がこれらすべての場面において無効ではないであろうし、道徳教育として児童・生徒に対し、「修養」的価値観を形成するプロセスを踏ませることが大いに有効であることも多いだろう。しかし述べてきたように、それを無自覚で行うことは極めて危険なのである。

重要なことは、道徳授業における題材の吟味をはじめとして、指導内容、生徒に求める活動の内容の適切さを慎重に吟味することであろう。その際前提となるのは、教師自らが持つ価値意識について冷静に考察して十分に自覚する、という基本的だが困難な作業を行っていくことであると考える。

注

- (1) 柴野昌山 (1990) 教育現象の社会的構成 p.153, 高文堂出版社, 東京。柴野は同書において、P.W. ジャクソンに始まる潜在的カリキュラム研究を整理しつつこのような最大公約数的な定義を用い、学校教育を社会学的に再構成するという試みを行っている。本稿にとっても有用な定義であると考える。
- (2) 筆者が『トイレの神様』に注目したきっかけについて一言記しておきたい。筆者がこの曲を知ったのは、2009年度学習院大学「道徳教育の研究」学期末レポートにおいてであった。道徳授業の題材を見つけるという課題に対して、1人の学生がこの曲の歌詞を提出した。レポートを読み、「修養」的心性をストレートに歌い上げていることに驚いた筆者は、その後2010年度宮城大学「教職概論」、同年度國學院大学幼児教育専門学校「教育原理」、同年度二松学舎大学「教育原理」、2011年度日本女子体育大学「道徳教育の研究」、同年度立正大学「社会教育活動論」、同年度東京未来大学「道徳教育」、同年度十文字学園女子大学「教育学概論」、2012年度日本女子体育大学「道徳教育の研究」、の各授業において「修養」を取り上げ、その題材として『トイレの神様』を紹介し、受講学生に感想を求めた。『トイレの神様』を教示くださった岡本真奈美氏 (当時学習院大学経済学部2年生) および、その後の各大学等における授業に参加し、感想を記してくれた学生諸君に感謝したい。
- (3) ここで、すでに教職を離れている水谷氏を事例とするこ

とに、疑問を持たれるかもしれない。しかし水谷氏の「夜回り」は定時制高校教員として始められ、12年間教員として続けられた。そうした行為に至る価値観形成も、教員として行われた。また、退職後も多数の学校で生徒たちに講演を行っていることを考えれば、水谷氏を取り上げることにさほど問題はないであろう。

- (4) 現に、文部科学省は外国人児童生徒の日本語学習支援カリキュラム (JSLカリキュラム) の開発を、2001 (平成13) 年度から進めている。
- (5) その意味で、本稿で取り上げたトイレ掃除には注意が必要である。そもそもトイレ掃除は自覚的な「修養」実践においても重要な形態の一つであり、西田天香が開いた一燈園などが有名である。実業の世界でもしばしば用いられるものであるが (鍵山秀三郎・亀井民治 (2005) 掃除道: 会社が変わる・学校が変わる・社会が変わる, PHP 研究所, 東京. など), 学校教育において掃除が教育上効果がある、として生徒自身が主に学校を掃除する国は日本をはじめとした東アジアの少数国にとどまるという調査結果がある (沖原豊 (1978) 学校掃除: その人間形成的役割, 学事出版, 東京.). この調査は1970年代の古いものではあるが、現在でも一定の有効性を持ち得よう。「掃除」という肉体労働に対する価値観が社会により異なることを考慮に入れる必要があるだろう。
- (6) 同時に徹底的に考えることで、反対のベクトル、すなわち無責任や他罰的な態度に対する指導にもつながる、有効な指導方法となろう。
- (7) 授業時には「各自が共感するかどうかは別にして、なぜこの曲がヒットしているのか、この曲がどういう考え方をしているのか」を冷静に考えるように、繰り返し注意しているのだが、学生は往々にして、筆者が「この曲は良いから共感しろ」と考えているととらえがちである。
- (8) 2006年12月に改定された教育基本法でも、第9条1項において教員は「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」と定められているが、「修養」の具体的な内実は示されていない。

引用・参考文献

- 1) 日本道徳教育学会 (2011) 道徳教育学会会報 20 : p.2.
- 2) 「道徳のチカラ」中学 (2011) とっておきの道徳授業 9, p.11-118, 日本標準, 東京.
- 3) 著者代表村井実, 小学道徳 心つないで 6, p.12-123, 教育出版, 東京.
- 4) 「修養」の項, 広辞苑第4版 (新村出 編) による.
- 5) 修養研究部会 (2012) 野間教育研究所紀要第51集 人間形成と修養に関する総合的研究, 公益財団法人野間教育研究所, 東京.
- 6) op.cit., p.5.
- 7) 瀬川大 (2005) 「修養」研究の現在, 研究室紀要32, 47-48.

- 8) 内藤俊史 (2012) 修養と道徳—感謝心の修養と道徳教育：修養研究部会, op.cit.,p.529-577.
- 9) op.cit.,p.523.
- 10) 村井実, op. cit. ただし紙幅の都合から, 改行箇所は適宜変更した.
- 11) 植村花菜 (2010) トイレの神様, p. 54-84, 宝島社, 東京.
- 12) op.cit.,p.43-44.
- 13) op.cit.,p.127.
- 14) op.cit.,p.134-142.
- 15) op.cit.,p.143-148.
- 16) ベネディクト, ルース：長谷川松治訳 (2005) 菊と刀—日本文化の型—, p.284, 講談社 (講談社学術文庫), 東京.
- 17) op.cit.,p.286.
- 18) 著者代表真仁田昭, 新井邦二郎, 6年生の道徳, p.122-125, 文溪堂, 東京. 以下の記述は断りのない限り本書による.
- 19) 西山登志雄 (1984) ホクの先生はカバだった, ポプラ社, 東京.
- 20) op.cit.,p.79.
- 21) op.cit.,p.80.
- 22) 水谷修 (2004) 夜回り先生, サンクチュアリ出版, 東京. ただしここでは小学館文庫版 (2009) を用いる.
- 23) 以下の記述はop.cit.,p.135-137.
- 24) 以下の記述は長文の引用も含め, op.cit.,p.189-193.
- 25) op.cit.,p.216-217.
- 26) ベネディクト, op.cit. では, 第11章「修養」全体が驚きに満ちて叙述されている.
- 27) 松下良平 (2011) 道徳教育はホントに道徳的か? : 「生きづらさ」の背景を探る, 日本図書センター, 東京, 参照. 本書冒頭で取り上げられる題材「手品師」の例は象徴的である.

(平成24年9月11日受付)
(平成24年12月19日受理)

